

# 大学年報の編集方針と活用について

大学年報編集委員会

委員長 山口 光治

2012（平成24）年の淑徳大学年報が、みなさまのご協力を得てこのほど発行に至りました。執筆や編集、取りまとめにとご尽力いただきましたことに感謝申し上げます。

本年報の編集を進めるにあたり、これまでの編集方針や編集手順、年報の活用状況などについて関係教職員よりご意見を伺うことからスタートしました。そのなかで大きな課題だと感じたことが何点かありました。第一に、年報発刊当初は、自己点検・評価の不断の実施、教育事業等の成果の公表、大学基礎データ等の収集・蓄積と情報公開を目的として作成されていましたが、年を追うごとに年報を作成するという手段が目的化され、本来の目的が不明確になってきているのではないかとこの点です。そして、第二に、年報作成の目的と関連しますが、その目的のためにどのような内容を記載していくのかという記載内容の課題です。第三に、年報の編纂のための組織がなく、効率的な編纂作業となっていないという点です。第四に、関係者にご苦勞いただいて発行された年報が、十分に活用されていないのではないかとこの発行後の活用の課題です。これらの課題が浮き彫りになり、その改善に向けて、次のように取り組むこととなりました。

**「大学年報の発行は、大学の自己点検・評価の一環である」ことを基本方針として、大学の教育・研究水準の向上および管理運営の健全化を図るために設けられた「大学自己点検・評価委員会」が実施するPDCAの取り組み結果をまとめ、公表することを目的とします。**そして、年報では、本学全体の教育・研究の取り組みを把握し、内部質保証体制の構築に向けた独自の点検・評価を行うために、①全学（大学共通）の取り組み、②学部の教育成果指標の達成に向けた進捗状況、③学部や学科、委員会やセンター等の取り組み状況、④認証評価の指摘事項・改善事項に対する対応の進捗状況などを掲載していくこととなりました。また、これら取り組み状況の掲載のみならず、年報作成過程において大学附置組織の実体化に向けた体制の見直しに関して課題提起できたことも年報発行の副次的な成果と言えます。

年報の発行については、「**大学自己点検・評価委員会**」が主管となり、「**学部自己点検・評価委員会**」との連携のもと取り組み、具体的な編纂実務については、委員会のもとに「**大学年報編集委員会**」を設けて進めます。

PDCAサイクルを用いた自己点検・評価の仕組みは、2012（平成24）年度から各学部や各キャンパスの実情を踏まえつつ全学的に導入されましたが、その取り組みの進捗状況は学部によって異なります。したがって、その公表となる2012（平成24）年度の年報では、学部等によって記載内容の範囲やプランの立て方、チェックの仕方などが異なります。今年度はPDCAサイクル導入の移行期としてやむを得ませんが、次年度以降、本年報が活用されるなかで、それぞれの学部や委員会等が相互に、どのような目標を立て、どのように取り組んでいるのかなどを参考にし合えるようになるのではないかと期待しています。それが発行後の活用につながることを思います。

最後に、年報の発行時期ですが、翌年度末となってしまうことについて、もう少し早い時期に発行できるよう改善が必要であると感じており、次年度に向けて取り組む予定です。その他にも年報に関する課題はまだ多く残っています。教職員の皆様、ならびに公開情報として年報をご覧いただいた皆様から忌憚りの無いご意見をいただき、本学の自己点検・評価のいっそうの推進につながるように活用してまいりたいと思います。